

## 第4章 リマにおける社会移動とグローバリゼーション —— 社会階層と空間の再編成 ——

キーワード：新たなミドルクラス、消費パターン、ライフスタイル、地位の一貫性、  
「普遍的価値観」

山 脇 千 賀 子\*

Globalization and Social Mobility in Lima :  
Analysis of the Re-formation of Social Strata and Space

Key Words : emerging middle class, consumption pattern, lifestyle, consistency of social status, “global ideology”

YAMAWAKI Chikako

This paper focuses on the effects of globalization to analyze social mobility in Lima after 1990, based on research carried out by the author about the lifestyles of residents in two districts ; one of lower socio-economic level (“El Agustino”) , and the other of higher level (“La Molina”).

According to the analysis, the effects of globalization in Lima are as follows : 1) an “emerging middle class”, which differs from the traditional “criollo” type, began to appear in the 1990s, 2) the economic differentials between people, which already existed before, are expanding, 3) these economic gaps may increase through the reproduction of the social strata based on educational background, 4) Peruvians have experienced American type consumer culture by watching TV or visiting shopping malls, mainly constructed in the 1990s in their country. In particular, the young generation, irrespective of socio-economic level, has become familiar with the universal type of “popular culture”, 5) Lima’s residents are now forming de-territorialized identities through the “popularization” of migration to foreign countries and the accompanying experience of direct communication with foreign people and culture. Meanwhile many people have taken part in international cooperation projects for development and/or human rights, including NGO activities, by means of which they share “global ideology”. Thus, we have examined the effects of globalization in Lima as a process of re-formation that de-territorializes time and space in social life.

---

\* 文教大学国際学部

はじめに	II. 消費構造とライフスタイルからみる社会階層—社会経済レベルと消費行動—
I. リマにおける「新たなミドルクラス」 —空間再編と社会階層構造—	1. 社会経済レベルと消費構造の特徴
1. コノスの誕生	2. ライフスタイルからみる社会階層
2. “新しく出現してきたミドルクラス” とは—地位の一貫性と社会移動概念 からの分析—	III. 外国とのつながりと新たな社会階層化 への兆し
	1. 出移民情況
	2. 「普遍的価値観」の普及と社会階層 おわりに

## はじめに

社会移動(social mobility)という概念は、一社会内の空間的移動と社会階層間移動をあわせて用いられてきた。そうした意味で、20世紀を通じてペルーは大規模な社会移動を経験した。特に空間的移動という側面では、大規模かつ短期間に農村部から都市部へむけた国内移住の流れが目立った。1940年時点では農村人口が全人口の65%を占めていたが、1970年代初めには都市人口の方が過半数を上回るようになり、1990年時点では都市人口が70%を占めるまでになった。つまり、半世紀の間に農村—都市人口比率が完全に逆転したことになる。社会の産業構造上の大転換期である。

こうした国内移住によって、リマはペルー全人口の三分の一を占める首座都市(mega-city)となった。同時に、その他の地方においても各々の中心都市への農村からの人口流入とそれに伴う社会変動が平行に進行している。こうした社会変動のプロセスは社会問題として認識され、特にリマにおける国内移民がもたらす社会構造の変化には、社会問題解決のための実践的側面からだけでなく学術的側面からも大きな関心がよせられてきた。

リマ首都圏の人口分布は、ドラスティックに変化してきた。1956年には、主に国内移民により構成される都市低所得者居住区であるプエブロ・ホベン(pueblo joven)居住人口がリマの全人口に占める割合は9.5%だったが、1961年には17.2%となり、1972年には24.4%、1981年には32.5%、1983年には36.4%にまで増加している[Matos Mar 1991: 71-2]。そして、1990年代にはプエブロ・ホベン居住者は、移住による都市への適応期を経過し、都市生活の基盤整備を終え、リマ生まれの二・三世が成人していく過程に入った。こうして誕生してきた新たなリマ住民(“Nuevos

Liménos”)を含めて、リマという都市における異なる文化をもつ人々が織り成す社会的相互作用がリマの全体像を変化させている状況を総合的に把握する試みが、1990年代以降のペルーにおける研究成果として現れてきている [Tempo1993]。Matos Mar [1991] では、都市大衆層 (clase popular urbano) が主役となって、新たなリマ、ひいては新たなペルーが形成されつつあるという前提に立った社会分析が行われている。社会移動概念からいえば、社会階層間移動と密接にむすびついた問題である。

本章の目的は、こうした1990年代以降のリマにおける社会移動を読み解く鍵となる多様な意味でのグローバリゼーションの影響を分析することである。ここでは、グローバリゼーションがもたらしている社会的作用として、「脱領域的」性質をもつ空間的・時間的編成として理解しておこう [伊豫谷編2002: 3]<sup>1)</sup>。近代社会秩序を支えてきた様々な境界 (例えば、政治/経済的主体としての国民国家、人種/民族、社会階層など) を越えて、ヒト・モノ・カネ・情報が世界規模での移動を加速化している事態を現代におけるグローバリゼーションと捉えたと、明らかにグローバリゼーションは新たな社会秩序形成を促進する機動力となるとともに、その結果ともなっている。

本章では、その変動しつつある近代社会秩序のひとつである社会階層に注目する。具体的には、リマ市民のライフスタイル調査を基にして、1990年代以降の社会階層の再編過程を分析してみたい<sup>2)</sup>。主な分析データは、発表者が行ったリマの低所得者居住地区エル・アグステイーノ (El Agustino) [2000年8~9月実施] および高所得者居住地区ラ・モリーナ (La Molina) [2001年10~12月実施] の各10世帯において行った調査票を用いた面接調査、およびエル・アグステイーノ区での2世帯における参与観察により得られたものである。その他、二次資料による補足もしながら分析する。

- 1) したがって、グローバリゼーションはなにも最近数十年の間に発達したものというわけではない。ウォーラステイン (I. Wallerstein) の世界システム論的な視点からいうならば、16世紀にリマという植民地都市が建設されたこと自体が「グローバリゼーション」の帰結である。
- 2) 近年ライフスタイル研究というと、いわゆる先進国で行われているような大規模な社会調査による統計的手法を用いた研究を想起される場合が多い。特定の商業的ターゲットを達成するために行われるマーケティング調査が典型であろう。ペルーでも特に90年代よりこうした調査が行われるようになってきた [Arellano Cueva 2000]。ただし、例えば1955年以降10年ごとに行われている日本のSSM (社会階層と社会移動) 調査のような、全国レベルでの統計的に有意なデータを用いた比較的長期 (30~50年) のタイムスパンにわたる研究はない。現段階ではデータの制限により不可能である。したがって、本章では人々の家計・ライフスタイルに関する質的調査によるデータに基づいたグローバリゼーションの影響について検証を行っている。

## I. リマにおける「新たなミドルクラス」 —空間再編と社会階層構造—

### 1. コノスの誕生

社会階層・階級研究をリードしてきた「二つの大きな物語」が後退して、新たな「物語」を必要とする時代に入ったという指摘はいわゆる先進欧米諸国を中心に行われてきた〔盛山・原・今田ほか編 2000 : i〕。すなわち、マルクス主義というプロレタリア革命による階級社会の終焉という「物語」も、産業化に伴う政治的・社会的民主化による平等の進展という産業主義的近代化論にも、社会の未来像を託すことができないという事態が進行しているというわけだ。

そうした流れは社会秩序の再編を求める社会運動の変遷にもみてとることができる。従来の階級闘争史観に基づく社会運動は低調となり、争点としてエスニシティ、ジェンダー、環境、人権、健康などを掲げた「新しい社会運動」(A. Touraine) が興隆してきた。ラテンアメリカにおいては、70年代後半から80年代前半にそれまでになかったタイプの先住民運動、女性運動、貧困層地区住民運動、人権運動などが注目を集めた。こうした「新しい社会運動」によって新たな社会秩序が形成される可能性への期待は高まったが、90年代以降停滞期に入ったとする評価が一般的になっている。その背景には、社会運動のライフサイクルの問題があるだろう。つまり、運動の成果とともに、こうした争点がグローバル・イデオロギーとして国際機関などを通じて社会に普及してきたことによって、制度的にもある程度の権利保障が達成されたことが、運動の停滞につながっている。

こうした社会運動の傾向が明確になった90年代のリマという都市において進行したのが、空間的イメージの再編である。歴史的に植民都市としての機能を担ってきたリマは、19世紀後半、特に太平洋戦争(1879-83年)以後に都市を取り囲む市壁を壊して近代都市への変貌をめざす。20世紀前半には、都市中心部の老朽化と人口増加があいまって、郊外へとミドルクラスの住宅地開発が展開される。20世紀後半には、さらにその周辺部に地方からの国内移住者が大量になだれ込むようになり、低所得者居住地域が形成される。同地域は、その形成期によりバリアーダ (barriadas)、プエブロ・ホベン (pueblos jóvenes)、アセンタミエント・ウマノ (asentamientos humanos) など様々な呼び方をされてきたが、いずれにしても「不法占拠によって形成された」、「貧困層のための劣悪な居住地域」というイメージが分かち難く結びついた呼称に

なっている。

ところが、90年代になるとこれらの低所得者の集住する周辺地域が、リマ中心部からの地理的位置関係によって3つの地域にグループ分けされて、東コノ・北コノ・南コノという呼称が一般に使われるようになり、あわせてコノスとして認知されるようになった<sup>3)</sup>。こうした変化は、まず何よりも公的政策に関わる立場からの便宜上の地域区分であることは明白だが、リマに住む人々のイメージ変化ともむすびついている。

90年代以降は特に、コノスにおける電気・上下水道敷設・街路の舗装などの生活インフラ整備が進んだ。それは、移住者の第一世代が都市における生活の基盤を築き上げるために、住民参加型のセルフヘルプ的開発プロジェクトを進めた成果であり、90年代のフジモリ政権が都市下層を重要な支持基盤としていたこともあって、同地域で優先的に生活インフラ整備関連の公共事業が展開されたという事情も影響している。したがって、同地域が危機的な最低限の生活が営まれているところだというより、中の下クラス (clase media-baja) と位置付けられるだけの生活インフラ条件を備えた住宅地域として認識されるようになってきている。それは、政治家たちの居住者からの支持を得たいという欲望と同地域の居住者たちの自尊心を満足させるものである。そうして、同地域に対するネガティブなイメージを払拭して、中立的なイメージをもつ「コノス」という呼称を使うことによって社会認識を変化させているということができよう。

ただし、だからといってコノス住民がすべてミドルクラスと位置付けられるわけでは決してない。特に移住時期による住民間での社会経済的格差は歴然と存在する。たえず移住者が流れ込んでいるコノスでは、都市生活のノウハウを蓄積している移住者第二世代と新移住者が共存する状態にあり、コノス住民とひとことであっても社会移動可能性などの面では多様性に富んだ存在である。

## 2. “新しく出現してきたミドルクラス” とは

### —地位の一貫性と社会移動概念からの分析—

こうしたリマの空間再編の動きには、社会階層再編が対応している。新たな社会

---

3) 1990年時点では、東コノ (アテ区、チャクラカージョ区、エル・アグスティーノ区、ルリガンチョ区、サン・ファン・デルリガンチョ区)、北コノ (カラバイジョ区、コマス区、インデペンデンシア区、プエンテ・ピエドラ区、サン・マルティン・デ・ポレス区)、南コノ (チヨリージョス区、サン・ファン・デ・ミラフローレス区、ビジャ・エル・サルバドル区、ビジャ・マリア・デ・トリウンフォ区) といった地域区分がされている [Dietz 1998 : Map]。

階層のひとつとして注目されるのが“新しく出現してきたミドルクラス”(class media emergente)である [Portocarrero 1998 : 18-21]。

ペルーにおける従来型のミドルクラスとは、“クリオーリョ・ミドルクラス”(class media criolla)であり、近代的主体モデルに則って規律・成長志向をもち、物質的快適性や自己能力の開発・発展をめざす集団である。しかし、だからといってそれまでのエスタブリッシュメントによる植民地主義的・人種主義的価値観を否定したわけではない“クリオーリョ”的性質をもっている。

“クリオーリョ・ミドルクラス”が「白人・コスモポリタン・クリオーリョ」というアイデンティティによって特徴づけられるのに対して、“新しく出現してきたミドルクラス”は都市化されたアンデス文化をもつ人々とされる。つまり、アンデスの伝統文化といわれる勤勉性・共同性志向と、近代的価値とされる個人の発展や効率性を重視する志向を節合したアイデンティティを形成しているという。こうした“新しく出現してきたミドルクラス”を形成しているのは、具体的にはリマを中心とした都市部で企業家として経済的成功を取めた地方出身者であり、そのエートを「チョコ企業家文化 (cultura empresarial chola)」として理解しようとする研究者もいる [Tapia 1998]。

“新しく出現してきたミドルクラス”は、従来のペルーにおける基本的社会構造の二元的枠組みからはみだした階層である。ペルー社会の基盤を植民地社会の特性にもとめ、支配セクターと被支配セクターに分割して、前者が都市・スペイン的伝統・「近代性」・資本家というイメージとむすびつき、後者が農村・アンデスの伝統・「後進性」・労働者につながるものという理解は、根強くペルー住民の心に刻み込まれている [Fuller 1998 : 452]。こうした視点からいうなら、“新しく出現してきたミドルクラス”は、従来の支配セクターと被支配セクターのハイブリッドといえるだろう。それだけに、社会階層としての正統性が社会的に認められるには、それなりの時間の経過とイメージ形成が必要である<sup>4)</sup>。現在のところ、人種-エスニック的特徴や文化的特徴と社会階層の結びつきが確実に変化してきていることを観察できるものの、だからといって新たな社会階層構造が確立されたとは断定できない状況だといえるだろう。

4) この点で重要な役割を果たしたのが、いわゆる植民地社会型の支配・被支配セクター構造からみて中間的・両義的立場にある日系人という出自をもつフジモリ大統領の登場、およびその政権下(1990-2000年)での内閣主要ポストへの先住民系・中国系・日系・ユダヤ系などのいわゆるマイノリティ的なエスニックバックグラウンドをもった人材の登用だったといえるだろう。ただし、この点に関する実証にはより詳細な調査が必要である。

この問題は、社会階層論で扱われる「地位の一貫性」の議論と関連すると同時に、グローバル時代の社会移動研究のあり方をどのように模索すべきなのか、という論点につながる。

地位の一貫性とは、職業威信・学歴・収入のつりあいのことをさすが、いわば経済的地位とそれに関連した社会的地位の安定的な対応が社会階層を形成しているとする考えである。しかし、ここで挙げられている変数は、あくまで経済的生産活動を重視した設定である。いわゆる先進国の社会分析に関してはこうした変数設定が適当なのかもしれない。だが、「社会的」地位という以上、地位を決定する要因は、社会ごとに異なるのが当然であろう。「リマ社会」において社会階層を決定づける要因として重要な役割を果たしているのは、ライフスタイルという消費行動に関わる側面である。それは、近代における「リマ社会」形成の歴史を分析する過程で検証できる。

19世紀末から20世紀前半のリマにおけるミドルクラスの問題を社会史的視点から分析したパーカーによれば、消費パターンは重要な社会上昇「手段」として位置付けられる<sup>5)</sup> [Parker 1995]。つまり、自分が所属したいと考える集団に特徴的な消費パターンを身に付けることによって、所属が達成されるのである。これは、消費パターンを社会経済的地位の結果＝「従属変数」と考える近代資本主義的な論理の転倒になっている。

近代資本主義的論理が貫徹した社会であれば、より多くの資本を獲得すれば、経済的地位は上昇し、連動して社会的ステータスも上昇するメカニズムが働くと考えられる。しかし、当時のリマ社会において、社会上昇を果たすには当該社会階層にふさわしいライフスタイルを社会的に誇示しておかなければならなかった。いわば、当時の地位の一貫性は、職業威信・学歴・ライフスタイルのつりあいとして認識されていたといつてよいだろう。このため、当時のミドルクラスという新たに出現した社会階層に属する人々は、必死に社会上昇のために植民地期から確立されている支配セクターのライフスタイルに追随しようとした。そうしたミドルクラスに対す

---

5) パーカーの分析によれば、当時のリマで受け継がれてきた貴族的伝統に従うと、由緒正しい家族にふさわしい住居、紳士淑女にふさわしい服装、交通手段、食事場所、娯楽場所、良家の子息にふさわしい学校などが厳格に決まっていた [Parker 1995: 170]。このようにライフスタイルという概念に含めて考えることができる事項は非常に幅広く、抽象的な把握が難しい。本章では、具体的な消費パターンと生活を貫く価値観や趣味・好みとしてライフスタイルを捉えることにしたい。こうしたライフスタイルと社会経済的地位の対応関係について、フランス社会を対象にして大規模な社会調査を詳細に分析した業績としては、[ブルデュー 1990=1979] を挙げることができる。

る支配セクターからの嘲りが、ワチャフェリア（成金趣味、huachafería）というペルー独特の言い回しとなって成立したのが20世紀初頭だとされる [Hildebrandt 1994 : 231 - 5]。

つまり、リマ社会には、生産手段の有無を基準に階級を区別するようなマルクス主義的な社会に対する理解では捉えきれない「消費社会」としての伝統が根ざしている、と理解する必要がある。もともと副王領ペルーの首都リマにおいて、職業威信が最も高い植民地行政官などの官僚には、生産主義的心性は無縁といってよい。使用価値よりも象徴的価値が重要な意味をもつ示威的消費（デモンストレーション）行動こそが、社会階層の秩序を形成してきたといえる。

別の視点からいえば、特定の社会階層にふさわしいライフスタイルについて、当該社会成員の間で共有されている明確なイメージが存在しているような社会としてリマを捉えることができる。そうした意味において、20世紀初頭までのリマは地位の一貫性モデルに近い比較的安定した社会階層構造をもっていたといえるのだろう。そして、社会移動が活発化して、この構造が崩れてきた時に、ワチャフェリアという新たな社会現象を表現する言葉が生まれてきたのである。

古典的な社会学説では、近代社会とは社会移動の増大によって特徴づけられるとされた。そして、社会移動に関する主な研究手法としては、移動に際しての「機会均等」および出自・属性ではなく個々人の業績による「社会的地位」の獲得度を検証することによって、近代化の程度を「診断」するような業績が挙げられている。

しかし、問題なのは社会移動という概念が、基本的にそれ自体で完結した社会における成員の移動を想定しているモデルであるということだ。ペルーにおける空間的な人口移動は、一つの社会内で起こっているというよりは、複数の社会間での移動という方が現実に近い。20世紀後半をつうじて加速化した国内移住は、先住民人口比率の高いアンデス社会から、スペイン人が基盤を築いた植民都市リマという異なる社会原理によって形成されている空間への移動が、大部分を占めた。複数の社会が存在する以上、「機会均等」や「社会的地位」といったものを決定する基準についても多様になる。

このような国内移住によって、リマにおける社会的なコンテクストの多重性・多層性が増大したということは、社会における生産や消費に関する意味体系を共有していない成員の増大を意味する。こうした人びとの一部で「近代化」を達成した人びとが「新しく出現してきたミドルクラス」と呼ばれていると考えてよいだろう。

つまり、“新しく出現してきたミドルクラス”には、二つの錯綜した階層化が作



用している。第一に、国内移住者であることは、植民地期からのリマの支配セクターがもつ文化的背景（ライフスタイルや価値観など）とは異なる相対的に劣位にあるアンデス文化または地方文化をもっている人びととして社会的に認知されることを示す。ところが、第二の階層化は、「近代化」されているか否かという基準による差異化である。“ミドルクラス”と呼ばれるのは、この点において近代的価値（個人の尊重・効率の重視など）をもつことによって社会経済的地位を上昇させることに成功した人々として認知された場合といえよう。

社会移動という概念にもどってこの錯綜した階層化の意味を考えてみるなら、「近代化」という概念の再検討が必要になるだろう。とはいえ、こうしたテーマを十分に議論することは本章の課題を大きく越えることになる。ここでは、本章における今後の議論の展開に最低限必要だと思われるペルーにおける「近代化」が孕むふたつの方向性を指摘するにとどめよう。

ひとつは、前スペイン植民地期からの先住民的伝統に対する「文明化」という意味合いをもつ「近代化」の方向性である。この際、植民地期からの支配セクターとして君臨してきたスペイン的伝統が「近代化」のシンボルとなる。

これに対して、共和国成立以降のペルーにおいては、発展の遅れの原因をスペインの伝統にみだし、ヨーロッパでも「近代化」をいち早く達成したイギリス・フランスにおける資本主義と民主主義の原理を取り入れることが「近代化」として認識される思潮も生まれた。この流れは、現代においても「グローバル・スタンダード」の普及を「進歩」と考える思考様式として受け継がれている。

そうすると、どちらの「近代化」にしても、従来の支配セクターに属していなかった人々にとっては意味体系をもともと共有することのできない社会的コンテクストになる。したがって、このような異なる社会間を移動する場合について、従来の社会移動概念では適当な分析ができないことになるだろう。グローバリゼーションという脱領域的な時間・空間の再編成作用とは、まさにこうした問題をとりざたしていることになる。

リマという物理的な生活の場を共有していても、そこに生活している人々の意味体系が共有されているとは限らない事態が、まずは16世紀以降のヨーロッパ世界との折衝・交渉のなかで始まった。リマの植民地行政官たちは、現地で彼らの日常生活を全ての面でサポートしていただろう先住民やアフリカ系奴隷たちとはなく、スペイン本国の行政官たちと意味体系を共有していたはずだ。所属すべき集団が物理的空間を共有していない事態は、何も20世紀後半になって初めて起こったのでは

ない。グローバリゼーションが社会に与えている影響については、こうした歴史スパンのもとに考察されるべきであろう。

とはいえ、本章で分析対象としているのは、90年代以降の主にリマにおけるグローバリゼーションが社会に及ぼしているものについて、社会空間と社会階層の再編という視点から解きほぐす作業である。

## II. 消費構造とライフスタイルからみる社会階層 —社会経済レベルと消費行動—

### 1. 社会経済レベルと消費構造の特徴

では、実際のところ、90年代のペルーにおける消費構造からみえてくる社会階層構造とはどのようなものなのだろうか。データの制約から、リマ首都圏ではなく全国レベルでの家計調査から収入レベルのカテゴリー別にエンゲル係数（全支出に占める食費が占める割合）を割り出した（表1参照）。これをみると、もっとも重要な分岐点は2つある。1つ目は、B1とB2の間で20%台から30%台への移行がある。2つ目は、C1とC2の間で30%台から50%台以上への移行がある。つまり、家計の消費構造を考えるうえで古典的指標となっているエンゲル係数から考えて、収入のレベルで階層化された8つのカテゴリーを、以下の3つのグループに分類することができる。すなわち、①上層：A1、A2、B1、②中間層：B2、C1、③下層：C2、D、Eである。

ペルーにおける代表的な社会調査会社のひとつであるアポーヨ社（APOYO Opinión y Mercado S.A.）のトーレス・グスマンの分析によれば、ペルーにおけるマーケット構造分析には収入や財産などの社会経済指標が有効な変数と考えられる（先進国のマーケット構造分析にはもはや時代遅れな指標と考えられているにもか

表1 家計調査：全国レベル（エンゲル係数）（2001年7月推計Apoyo調査）

	A1	A2	B1	B2	C1	C2	D	E
収入	5,000～	\$ 2,600	\$ 1,200	\$ 630	\$ 480	\$ 260	\$ 180	\$ 130
係数	20%～	18.5%	21.6%	31.7%	31.3%	50%	61.1%	69.2%

注 i ここで示されている世帯別収入レベルでのカテゴリー化は、1999年以降ペルーの主要な社会調査会社が共通に使用している基準である。

出所 etece, 15 de setiembre de 2001 : p.21より筆者作成

かわらず) [Torres Guzmán 2001 : 20]。既述のエンゲル係数ばかりでなく、家財の所有率によっても、かなり明確な階層差を把握できる。例えば、自家用車所有率(B1 : 71%/B2 : 32%)・洗濯機所有率 (B1 : 86%/B2 : 51%)・コンピュータ所有率 (B1 : 61%/B2 : 32%)<sup>6)</sup>などにみられるように、上層と中間層の格差は明らかだ。また、エンゲル係数にみられるように、最低限の生活を保障する食費が総支出の半分以上を占めている下層と中間層の格差も大きい。

より顕著な階層差による消費構造の違いを把握するために、筆者が行った調査結果に基づいて、上層と下層の具体的な家計の実態をみてみよう。

表2のラ・モリーナ区のケースは、A1階層に分類される高収入世帯である。夫婦はともに建築家であり、夫(48歳)は私立大学教員で妻(45歳)と建築事務所を共同経営している。ティーンエイジャーの子どもがふたり、長女は大学生、長男は中学生で、いずれも私立校に通っている。そのため、突出して支出額の大きい項目となっているのが教育費である。このケースでも教育費が食費の約3倍にのぼっているが、ラ・モリーナ区の他の調査対象世帯全体でも学校に通っている子どもがいるケースでは教育費が全支出額の50~25%を占めるのが特徴である。また、このケースで特徴的なのは、電話代も含めた交際費が大きいことである。夫妻は2日に1回の割合で、催事や会合などに出かける。

表2 高所得層の家計例

	支 出 額	割 合
住宅ローン	2,800ソル	19.2%
食 費	1,400ソル	9.6%
光熱費+水道代	600ソル	4.1%
教 育 費	4,100ソル	28.1%
医 療 費	1,800ソル	12.3%
電 話 代	900ソル	6.2%
交 際 費	1,200ソル	8.2%
衣 料 費	800ソル	5.5%
その他 (メイド給料含む)	1,000ソル	6.8%
合 計	14,600ソル	100.0%

6) 所有率データは、いずれも1999年時点での調査による [etece, 15 de setiembre de 2001 : 21]。

表3 低所得者層の家計例

	支 出 額	割 合
食費（ガス代含む）	900ソル	68.4%
光熱費+水道代	90ソル	6.9%
教 育 費	25ソル	1.9%
医 療 費	—	—
電 話 代	50ソル	3.8%
交 際 費	200ソル	15.2%
衣 料 費	50ソル	3.8%
合 計	1,315ソル	100.0%

他方、表3のエル・アグスティーノ区のケースは、C2階層に分類される低所得世帯である。夫婦で雑貨商を営む（夫51歳・妻48歳）。同居しているのは、20代の長女（中学校数学教師）、次男（専門学校生）、三男・四男（ともに小学生）さらに夫婦にとっての姪（家事手伝いおよび看護学校生）で、合計7名である。ラ・モリーナ区の場合との決定的な違いは、家計に占める食費の圧倒的に大きな割合である。エル・アグスティーノ区の調査対象世帯のほとんどで食費が全支出額の半分以上を占めている。ラ・モリーナでは、最高額を占めることの多い教育費は、他の支出項目に対しても微々たる額でしかない。これは、基本的には授業料が無料である国立校に通っているためである。

子どもを私立校に通わせることができるかどうか、という点は特にリマにおける社会階層分析において重要なメルクマールになっている。1960年代までは名門私立校と肩を並べるだけの名門国立校があったが、教育行政の失敗などにより国立校における教育レベルの凋落が特に80年代以降は顕著にみられるようになってきている。90年に成立したフジモリ政権下では国家の礎としての教育改革が掲げられて、学制改革なども含めた抜本的な建て直しが叫ばれたが、いまだに国家レベルでの教育体制への信頼は回復できていないといつてよいだろう。むしろ、90年代にとられた教育分野における規制緩和によって私立校乱立が進み、市場メカニズムに則る「新自由主義的」政策の結果として、教育面での格差がますます拡大しているといつてよいだろう。

この問題は教育がもたらす機会の平等／不平等という問題をめぐるペルーにおけるねじれた現状にむすびついている。国連開発計画（UNDP）の調べによれば、ペルーにおける識字化は着実に進展しており、成人識字率は1970年の71%から1995年には89%に、全教育レベルの合計就学率は1980年の65%から1995年の79%へと増加

傾向にある〔国連開発計画1998〕。つまり、読み書きの修得という最低限の教育レベルでの機会均等化は進んでいる。ところが、国立校における教育レベルの凋落によって、低所得層の子どもたちが質の高い初等・中等教育を受ける機会から遠ざけられる事態となっている。これが将来的には、低所得層の高等教育への平等なアクセスの障害になる可能性は高い。

ペルー社会において教育に期待されているのは、何よりも社会上昇の手段としての学歴の獲得であろう〔Ansión *et. al.* 1998 : 10-11〕。生まれもった属性にかかわらず本人の能力にふさわしい社会的地位を獲得することができると「仮定」されている近代社会においては、学歴獲得に将来の夢をかける人びとは少なくない<sup>7)</sup>。しかし、現在のリマの教育事情は「機会の平等」を保障しているといえるのか。高所得層の子どもは質の高い基礎教育を受けることにより高等教育への参入が可能となる一方で、低所得層の子どもは読み書きを覚える程度の教育以上のことを望むことができないのであれば、「社会上昇の機会は平等に開かれている」とは決していえないだろう。つまりは、教育をめぐる状況は既存の社会階層構造の再生産を促していることになろう。

もうひとつの重要な階層差を示す指標としては、家内使用人の有無（A1・2 : 100% / B1 : 67% / B2 : 32%）<sup>8)</sup>を挙げなければならない。掃除・洗濯・炊事・運転手などを担う家内使用人を雇う側に属するのか、雇われる側に属するのかという区分は、かなり明確な格差の指標である。また、雇う側でも複数の使用人がいるのかどうかという点が、上層と中間層の分岐点となっている。こうした状況は、雇う側と雇われる側の大きな経済格差（つまりは家内使用人の格安な賃金）によってもたらされている。

以上でみてきたように、社会経済レベルにむすびついた消費構造は、階層差という点からは明確な特徴を示している。

## 2. ライフスタイルからみる社会階層

1990年代以降の「新しいリマ住民」〔TEMPO 1993〕がもっている文化的背景（ライフスタイルを含む）の問題として、いわゆるアンデス文化とリマという都市文化

7) 社会上昇のための「機会の平等」を提供するしくみとして教育=学歴を後天的に獲得するというシステムの背後には「能力による不平等」を大前提とした社会的しくみがあることはあまり声高に取りざたされないが、この点はペルーのような階層差の大きい社会においては詳細な社会学的分析対象とされてしかるべきテーマといえよう。

8) データは1999年時点での調査による〔etece, 15 de setiembre de 2001 : 21〕。

の融合という事態が取りざたされたことや、「新しく出現してきたミドルクラス」がそれまでのミドルクラスがもっていた文化資本とは異なるためにミドルクラスとしての社会的承認への抵抗がいまだにみられることは前章でも指摘した。

しかし、ライフスタイルの問題は急速に変質を遂げている。特に注目されるのは、「若者層」における社会階層の境界を越えた“ポピュラー文化”の共有という事態である。1990年代以降の主にリマを対象にした都市人類学的業績のなかでも、ポスト近代的テーマとして取り上げられているのが若者論である [Sandoval 2000 : 308 - 320]。

“ポピュラー文化”とは、テレビ・ビデオやインターネットなどの各種メディアを通じて若者層へ普及した米国に代表される先進国型ライフスタイル（エンターテイメントやモノの消費だけでなく、その背後に働いている価値観を含む）と考えてよいだろう。特に、米国で製作されているラテン系マーケット志向のテレビ番組や音楽の影響力は甚大である。そこで掻き立てられるのは擬似現実における共通のイメージ・消費欲求であり、富裕層も貧困層も同じニーズを感じることになる。こうした新たな事態に最も敏感に反応するのが若者層なのである。

また、90年代を通じてリマにおけるテレビ事情を大きく変えたのは、ケーブルテレビの普及である。2001年時点での契約料金は一ヶ月あたり約120ソル（35ドル）であり、リマ市民の家計事情から考えた場合決して安価とはいえない金額であるにもかかわらず、表4にみられるように加入率は年々増加を続けている。筆者の調査でも、ラ・モリーナ区調査対象10世帯では100%加入しており、エル・アグスティーノ区でも10世帯中1世帯が加入していた。

表4 ケーブルテレビ加入率（リマ首都圏）：

	全 体	A層	B層	C層	D層
1996年	6.0%	59.0%	16.0%	1.0%	0.0%
1997年	12.0%	73.0%	33.0%	9.0%	0.0%
1998年	19.0%	81.0%	52.0%	16.0%	1.0%

出所 Najar1999 : 371 (CuadroNo.5)

ケーブルテレビの普及によってチャンネル数が飛躍的に増え、視聴者の多様な需要に応えられるようになった結果、国内テレビ局の放送をほとんどみない人々が現れてきている。ラ・モリーナ区10世帯のうち3世帯およびエル・アグスティーノ区の1世帯がこれにあてはまる。一日にテレビを見ている時間は、働いていない高齢

者ほど長いが、筆者の調査ではほとんどの人が少なくとも1時間程度はテレビ映像に接している。自宅できつろぐときにテレビで流れる映像が、生活の現場であるリマで発信されたものではなく、主に米国発信のスペイン語話者向け番組であることは、視聴者のどのような意識とむすびつき、そのことは社会的にみた場合どのような意味をもつのだろうか。

まず、国内放送をみないということは、情報を共有したいという欲求が国内にむけられていない、ということの意味するだろう。ペルーへの所属欲求よりも、ケーブルテレビで放送される「どこかちがう世界」とむすびつく方が選択されている。ペルー人としてのアイデンティティよりも領土性にとらわれないアイデンティティが重視されているとあってよいかもしれない [Sandoval 2000 : 320-321]。

現実のペルー社会という共同性からの逃避現象とみえるアイデンティティ意識は、個人主義的価値観の拡大にむすびつく。つまり、伝統的にペルー社会に生きる個人をむすびつけて共同性を生みだしてきたコンパドラスゴ、同郷者、近隣組織、家族がもつ重要性が低減してくることになる [Venturo 2001 : 143-164]。目の前にある現実よりも、メディア上の擬似現実の方が、個人々の諸活動を意味付けるような社会が現れつつあるといえるだろう。

ただし、“ポピュラー文化”は必ずしもメディアを通じた擬似現実界にだけ存在するわけではない。90年代に高所得者層住宅地近辺に出現したショッピングモールや大型スーパーマーケットは米国型消費スタイルを現実体験できる場になっている。テレビなどの映像を通じて見るだけだったショッピングモールやスーパーマーケットで買い物をするという行為が、身近な現実の場でできるということは、消費者にとっての大きな刺戟となる。特に、若者層においては、社会経済的階層に関係なく流行の先端といわれるショッピングモールを訪れる経験をしている<sup>9)</sup>。

19世紀リマにおける支配セクターのライフスタイルが模倣された事態と、現代における“ポピュラー文化”の共有という事態の違いは、模倣される対象となるライフスタイルが全ての人々（というのが無理ならなるべく多くの人）にアクセス可能な情報となっているかどうか、という点に集約されるだろう。限られた社交界にお

9) エル・アグステイーノ区の調査対象世帯における若者層の親の世代では、ショッピングモールには行ったことがない人がほとんどだった。行ったことがある人も「自分にふさわしくない場所」という感じがして居心地が悪くて楽しめなかったという。また、同区には近くに大きな卸売り市場がありスーパーがないこともあって、親世代のほとんどはスーパーで買い物をした経験がない。こうした意味で同地区における消費行動に関する世代間格差は大きい。これに対して、ラ・モリーナ区の調査対象世帯ほとんどに関しては、主な買い物を大型スーパーでするのが慣行となっている。

ける内輪のルールについて世間の人々が容易に知ることができなかった19世紀とは違い、現代社会にはあらゆる情報が氾濫している。しかも、19世紀社交界とはちがって、スーパーやモールに入るのに（基本的には）社会的地位をとりざたされることはない。そこでは、誰もが「平等に」特定の商品やサービスに対する消費欲求刺激を受けることになる。ただし、「本当に」消費できるだけの経済力をもっている人とそうでない人の格差は存続している。

こうした事態をうけて、現在のペルーではかつてなかったほど富裕層と貧困層は「近づいて」おり、同時に物質的環境の差異は拡大しつつあるというパラドクスを経験しているという都市人類学者の指摘はもっともなように思われる [Sandoval 2000 : 320-321]。消費意識や情報共有と言う意味での両者の差異がどんどん小さくなっていく一方で、新自由主義的経済政策による貧富の格差は大きくなっている。

そうすると、ペルー社会を社会経済レベルでカテゴリー分けすることは可能でも、そうした分類を社会階層と捉えることは社会分析上どの程度有効だといえるのか、という疑問が湧きあがってくるのは当然のことだろう。例えば、同じ世帯に属していながら異なるライフスタイルをもつ個人をひとつの社会階層として分類することにどれだけの意味があるのか。階層を越境するライフスタイルは、むしろペルー社会の世代間格差を浮き彫りにするかもしれない。世代間格差についての詳細な分析は今後の課題のひとつといえよう。

以下では、階層を越境して作用しているグローバリゼーションのもうひとつの要素ということができる外国とのつながりがもたらしている新たな階層化の可能性について考えてみたい。

### Ⅲ. 外国とのつながりと新たな社会階層化への兆し

#### 1. 出移民情況

16世紀以降、ペルーは一貫してヨーロッパやアフリカやアジアから流入する人々を受け入れる側にたっていた。ところが、20世紀後半には「移民受け入れ先」から「移民送り出し元」へと変貌を遂げる。1970年代までは、国外で生活しているペルー人は、限られたエリート層にすぎなかった。ところが、その後「国外脱出組」は増加の一途をたどり、1980年時点における海外在住者数は約50万人だったものが1994年には148万人に急増したと推計される [Altamirano 1996 : 171]。その多くは



ペルー国内の労働市場では適当な職を得ることができないため外国へ活路を求めた人々で、さまざまな社会経済的階層の人々を含んでいる [Altamirano 1992 : 77 - 79]。この他にも、外国生活を経験してペルーに戻ったという人々を含めて考えれば、推計以上の人々が外国での労働を経験していることになる。ペルー全体の人口比率では国外生活者は約7%になるが、リマ出身者に占める割合で考えた場合この比率はずっと高くなることが予想される。

筆者の調査によれば、ラ・モリーナ区の調査対象10世帯中すべての世帯において米国・スペイン・イタリアなどの外国に在住する親戚をもっている。エル・アグステイーノ区では10世帯中5世帯が該当する。また、親しい友人で海外在住者をもっているケースは、ラ・モリーナ区の場合8世帯、エル・アグステイーノ区の場合6世帯となっている。ラ・モリーナ区とエル・アグステイーノ区の調査対象世帯の所得格差を考えた場合、こうした外国とのつながりという側面において両者間にそれほど大きな違いがない事態となっていることが、現代におけるグローバリゼーションの特徴を明らかにしているといえるだろう。外国での生活を始めるにあたって当事者が必ずしも多額の資本を用意しなくてもよい雇用システムが世界労働市場に現れたことは、人の流れを大きく変えた。ハーヴェイなどが論じている1973年以降の資本主義を特徴づけるフレキシブルな蓄積体制の一角を占める問題である [ハーヴェイ 1999]。

このように、ペルーだけが自分の生活や労働の場とは考えていない人々が比較的大規模に出現している。エリート層のコスモポリタンにしか開かれていなかったグローバルな広がりをもつ生活空間が、全ての社会成員の眼前に展開しているという事態が社会に及ぼす影響は、決して小さくないだろう。世界労働市場に参加するメンバーシップを自分も持っているという意識は、ペルー社会への帰属意識を弱める方向へと作用するだろうことは想像に難くない。

実際、どのくらいの割合のリマ住民が外国への移民という可能性を組み込んだ生活設計をしているのかを訊ねた調査がある。それによると、調査対象となったリマにおける世帯主の17% (中間層の20%) が5年以内に外国に出る可能性があるという回答している [etece 2001 : 22]。この数字がもつ意味は、ペルー同様にグローバルな労働市場への参入意欲が掻き立てられている他国の例に比較するとより強く実感できるだろう。中国・天津市における中間層800名を対象とした調査によると、「金銭的余裕があれば何をしたいか」という問いに「外国への出国費用に充てる」と回答した者はのべ75名 (約9.4%) だったという [園田 2000 : 239 - 240]。リマの圧倒的

な外国移住志向がみてとれる。

こうした世界レベルでの労働力移動の加速化は、多くの場合、大衆消費社会型の消費パターンの普及を伴っている〔伊豫谷2001：24〕。にもかかわらず、移動する労働力が「生産」の現場に及ぼす影響について議論されることがほとんどで、「消費者」としての移動する人々はあまり注目されてこなかった。社会・文化面から移住する人々の論理を説明しようとする試みは、多くの場合、ホスト国において特異なエスニック集団を形成しているという議論にとどまりがちである。しかし、本章の議論においてより重要なのは、ホスト社会と出身社会における消費パターンの共通性の方になる。

かつてのエリート層コスモポリタンに関して言えば、世界のどこでも（とはいえ限られた上層による構成される社会だろうが）同じように生活できるという前提があった。ある意味では、現在の海外移民についても母国での生活と移民先での生活における「消費者意識」には、大きな差がなくなっているのかもしれない。「世界消費市場」の一員であるということは、高級な自家用車や家庭電化製品を獲得することが「幸せ」のシンボルとして機能する社会の一員であることを意味する。そうした欲求を比較的簡単に満たすことのできる米国や日本での生活に「幸せ」を感じる人にとっては、母国に帰って生活することに意味を見出せなくなる。

こうして外国生活を送る人々は、その意志にかかわらずホスト社会においてその社会がもつ固有の階層化作用を被ることになる。ホスト社会と母国における階層化が同一人物に関して異なる働きをする場合は、こうした人々のアイデンティティにどのような影響を及ぼすのか。グローバリゼーションがすすむ社会における重要な課題のひとつであり、現在のところ決定的な結論をだす段階ではないだろう<sup>10)</sup>。

## 2. 「普遍的価値観」の普及と社会階層

実は、既述のエル・アグスティーノ区で調査対象となった世帯のうち8世帯には共通点がある。同区のカトリック教会ナザレの聖母教区（Parroquia La Virgen de Nazaret、1969年制定）内にあるSEA（Servicios Educativos El Agustino、1979年設立）というイエズス会系NGOの活動となんらかのかかわりを持っている人々が協力者

10) グローバリゼーションがすすむ現代社会における新たなアイデンティティ概念として、ディアスポラ（diaspora）という言葉が社会科学分野でも取りざたされるようになってきたのが1990年代後半である。代表的な作品として、Appadurai [1996]、Cohen [1997]、Ong & Nonini [1997] などが挙げられる。

となっている。SEAの活動は多岐にわたるが、主に各種住民活動の組織化・コンサルタント的機能を果たす。具体的な住民活動の例を挙げると、コメドール・ポプラー活動<sup>11)</sup>、零細企業支援プログラム、都市計画・環境保護運動、青少年犯罪防止運動、家庭内暴力対策などを挙げることができる。SEAは、こうした住民運動の助けとなるような情報・資源を、区役所や該当省庁など国内行政組織から引き出すための仲介役となるだけでなく、いわゆる先進国である諸外国の開発パートナーシップ関連NGOなどとの連携にも寄与している。つまり、国際的に展開している貧困層を対象にした「開発プロジェクト」に関連するヒト・モノ・カネ・情報の連携に深く関与している。

ペルーにおける「開発プロジェクト」の多くは、なんらかのかたちで外国からの支援によって成り立っており、こうした活動の背景には開発・人権尊重・民主化といった価値をグローバルに普及させようという意図がある。逆にいえば、こうした価値がペルー社会において十分に普及していないことが下層の人々の貧しい暮らしにつながっているという前提にたったプロジェクトと考えてよいだろう。

このような市民社会における「普遍的価値観」の普及が、自分達の生活改善に密接にむすびついているという実感をもつことができる人々は、社会のなかでも少数派に属するだろう。エル・アグスティーノ区のような都市低所得者居住区においてSEAが支援しているような住民活動に参加して指導者的役割を果たしている人々の多くは、「普遍的価値観」にもとづき「社会改良」を行うことの重要性を強く意識しており、そうした動機に支えられて活動を続けてきている [SEA 1993 ; 1996]。

実際のところ、住民活動に参加している人々は、活動によって自分達の生活が良くなるか、少なくとも活動を通じて生活が支えられた経験をもつ。抽象的な市民社会の理念が、実践レベルで自分達の生活を良くするために役に立つ、という実感と体験をもつことができた「限られた」人々だといえるだろう。

このような「社会改良」にむけた強い動機を共有しているのは、貧困層と知識人・テクノクラートというペルー社会内では著しく社会的地位のかけ離れた人々である。この「奇妙な組み合わせ」を、筆者は参与観察の過程で目の当たりにした。リマ首都

11) コメドール・ポプラーとは、近隣住民が協力しあって共同調理をすることによって格安な食事を確保することを目的とした組織である。こうした組織は、大きく分けて以下のような3つの成立背景をもっている。1) 政党のてこ入れで組織化されたもの、2) カトリック教会系組織によるもの、3) 政治・宗教とは関係なく住民の自主的な組織化(*autogestión*)によるもの。エル・アグスティーノ区は、3) のタイプのコメドールが最も古くから(1978年ころ)発達した区として知られている。

圏コメドール連合における地区代表のひとりになっているLさんが、女性・人間開発推進省（PROMUDEH、Ministerio de Promoción de la Mujer y del Desarrollo Humano）主催の「北京会議（第4回世界女性会議）から五年を考える」会合（2000年8月）に招待されたのに筆者が同行したときのことである。会合に集まったのは、女性の社会的地位を向上させるための政府関連組織関係者、関連するテーマの研究をすすめている学識経験者、さらにコノスのコメドール指導者のほかはマスコミ取材陣であった。開催された場所は、豪華なレストランやマンションなどが立ち並ぶミラフローレス区にある最高級クラスのホテルで、テーブルごとに給仕がつく朝食サービスつきの会合スタイルは、いかにもコメドール関係者の日常生活からはかけ離れた雰囲気醸し出していた。

会合の中身は、ペルー女性がおかれているリプロダクティブ・ヘルス／ライツの面からみた劣悪な現状に関する報告とこうした状況を改善するために必要とされる方策などについての議論が主だった。Lさんは会合の間ずっと熱心にノートを取り、コメドール指導者の何人かは臆することなく質問状などを提出して議論に参加していた。会合終了後にエル・アグスティーノ区に帰るタクシーのなかでも、彼女たちは興奮した表情を浮かべたまま「いかに社会に役立つような活動が大事か」、「多くの人を活動に参加せしめるにはどのような戦略が必要か」というテーマについて熱心に意見交換をしていた。そのタクシーの中での議論は、彼女達の生活現場で起きている問題への取り組みが、抽象的な市民社会の理念と無理なくむすびついていることを示していた。

この会合はペルー社会の文脈からすれば、著しく異なる階層が同じ場所に集められた「ふつりあいな」イベントのようにみえる。しかし、この会合がおかれている文脈は、平等な個人により形成される市民社会の達成を目指す諸活動のながれなのである。目指されているのは、ペルー社会支配層が確立している体制ではなく、いまだ達成されていない理想的な市民社会と捉えられる。

このように「社会改良」に対する価値観を共有することによって、そこには一定の意味体系を共有する人々の「社会」が立ち現れる。下層の人々が熱心に自分達の生活現場における社会的活動を行うことによって、上層の人々とのむすびつきをもつだけでなく、そうしたペルー社会内でのカテゴリーさえも飛び越えた外国人との関係性をもつことになる。こうした意味で、市民社会の価値観を共有するグローバルな社会の一員としてエル・アグスティーノ区の人々を位置付けることができるだろう<sup>12)</sup>。換言するなら、次のようにまとめることもできる。もともとは、自分の家

庭のサバイバルを目的としたコメドール・ポプラー活動のような「社会活動」にかかわることによって、個人を超えた新たな「社会」をつくるためのネットワークに巻き込まれる。そのネットワークは、ペルーという現実存在する国家領域にだけ張りめぐらされたものではなく、世界において「普遍的価値観」に基づいた社会を形成するための諸活動として作用しているものなのである。

筆者の調査対象となったエル・アグスティノーノ区の人々は、こうした文脈において外国とのむすびつきの強い人々であるというバイアスがかかっていることを指摘しておかなければならない。

本章では、外国とのつながりがもたらす新たな階層化の兆しとして二つの方向性を示した。第一に、外国へ移民すること・外国生活をするによって異なる文脈での社会階層化の対象となること。そして、外国での社会階層がペルーにおける社会階層とは直接対応しない事態が進行している。第二に、近代市民社会の「普遍的価値観」を共有することによって、その普及のためにグローバルに展開・活動している人々とのむすびつきを形成することによって、ペルー社会において新たな社会階層を形成する可能性を指摘できる。

## おわりに

本章で注目したリマにおけるグローバリゼーションの影響およびその中身については、以下のようにまとめることができる。1) クリオーリヨ的伝統とはコンテクストを異にする「新たなミドルクラス」が形成されつつある。2) ただし、ペルーという領域内での国民間の歴然とした経済格差（以前から存在するが新たに生まれてもいる）は存在する。3) この格差は、将来にむけた教育を通じての階層再生産構造により拡大する可能性がある。4) 対照的に、メディアやショッピングモールなどを通じたアメリカ型消費文化への接触によって、階層を越えた“ポピュラー文化”の共有が、特に若年層を中心に達成されている。5) 脱領域的アイデンティティ形成にむけた動きとしては、a) 外国への移民現象の「大衆化」とそれにとりま

---

12) こうした文脈において都市下層における「草の根民主主義」の可能性をペルー社会の変革にとっての肯定的な要素と評価する研究と過剰評価するべきでないとする研究がみられる[村上1999]。本章では、この点についての詳細な分析をすることが目的ではなく、あくまでも市民社会的価値を共有する人々の間にある種の「社会」が形成されるという点を指摘するにとどめている。この「社会」内における階層化の可能性などについて論ずるためには別途詳細なデータ提示と分析が必要であろう。

う外国人／文化との直接的接触、b) 開発と人権尊重をめざす援助・NGO活動の普及／定着が大きな影響を及ぼしつつある。

1990年代前半にリマのカトリック大学の学生を対象にした、リマという都市についてのイメージ調査によれば、社会経済的階層によって異なる結果が示されている[González 1994]。同じ大学の学生でありながら、生活のレベルで経験していることが異なるためにイメージも異なるのだろう。こうした事態をパラレル・シティとして、複数の「リマ」が存在している状況とまとめられている。つまり、大学という近代的価値観を基盤とした「社会」における共通体験は、現実の生活の場に対する共通認識にはつながっていない。しかし、本章でみてきたように1990年代をつうじて、リマは空間的再編成と社会階層構造の変化を経験してきた。2003年現在で同様の調査を行ったとしたら、リマという都市に関するイメージは共通性を高めている可能性が高い。

以上でみてきたように、社会移動というテーマに焦点をあわせていても、グローバリゼーションの実像は多様性に富んでいる。喩えて言うなら、種類や方向の違う波が一拳に押し寄せている状況をグローバリゼーションと呼んでいるようなものかもしれない。こうした波にもまれながらリマに生きる人々は、異なる波ごとにその位置を変える波乗りといえるだろう。

## 参考文献

- Altamirano, Teófilo  
 1992 *Exodo : peruanos en el exteriores*, Lima : Pontificia Universidad Católica del Perú (PUCP) .  
 1996 *Migración : el fenómeno del siglo*, Lima : PUCP.
- Ansión, Juan, Alejandro Lazarte, Sylvia Matos, José Rodríguez & Pablo Vega-Centeno  
 1998 *Educación : La mejor herencia*, Lima : PUCP.
- Appadurai, Arjun  
 1996 *Modernity at Large : Cultural Dimensions of Globalization*, Mineapolis : University of Minnesota Press.
- Arellano Cueva, Rolando  
 2000 *Los estilos de vida en el Perú : cómo somos y pensamos los peruanos del siglo XXI*, Lima : Consumidores y Mercados.
- ボードリヤール, ジャン (Baudrillard, Jean)  
 1995=1970 『消費社会の神話と構造』(今村仁司・塚原史訳) 紀伊国屋書店。
- ブルデュー, ピエール (Bourdieu, Pierre)  
 1990=1979 『ディスタンス・オブ・II』(石井洋二郎訳) 藤原書店。
- Cohen, Robin  
 1997 *Global Diaspora : An Introduction*, Seattle : University of Washington Press.

- Dietz, Henry  
1998 *Urban Poverty, Political Participation, and the State : Lima, 1970 - 1990*, Pittsburgh : University of Pittsburgh Press.
- ダグラス, メアリー (Douglas, Mary)  
1984 = 1979 『儀礼としての消費』(浅田彰・佐和隆光訳) 新曜社。
- Fuller Osoreo, Norma  
1998 “Las clases medias en las ciencias sociales”, en Portocarrero, Gonzalo ed., *Las clases medias : entre la pretensión y la incertidumbre*, Lima : Sur Casa de Estudios del Socialismo & OXFAM-Gran Bretaña, pp. 443 - 458
- González Cueva, Eduardo  
1994 *Ciudades paralelas : imaginarios urbanos en Lima*, Tesis de Bachiller en Sociología de la PUCP.
- ハーヴェイ, デビッド (Harvey, David)  
1999 = 1990 『ポストモダンシティの条件』(吉原直樹監訳) 青木書店。
- Hildebrandt, Martha  
1994 *Peruanismo*, Lima, Biblioteca Nacional del Perú.
- Huber, Ludwig  
2002 *Consumo, cultura e identidad en el mundo globalizado : estudios de caso en los Andes*, Lima : Instituto de Estudios Peruanos (IEP).
- 伊豫谷登士翁編 (Iyotani, Toshio)  
2002 『グローバリゼーション』作品社。
- 国連開発計画 (UNDP)  
1998 『人間開発報告書1998—消費パターンと人間開発—』国際協力出版会。
- Matos Mar, José  
1991 “El nuevo rostro de la cultura urbana del Perú”, *América Indígena*, 51 - 2 & 3 : pp. 11 - 34.
- 宮島喬 (Miyajima, Takashi)  
1994 『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開』藤原書店。
- 盛山和夫 (Moriyama, Kazuo)・原純輔・今田高俊・海野道郎・高坂健次・近藤博之・白倉幸男編  
2000 『日本の階層システム』6巻、東京大学出版会。
- 村上勇介 (Murakami, Yusuke)  
1999 「ペルーにおける下層民と政治—1980年代以降の研究の特徴と今後の展開に向けての課題—」『地域研究論集』2 (1) : 141 - 179。
- Najar, Rosario  
1999 “Aproximación cuantitativa a la problemática de los medios de comunicación en el Perú”, en Carlos Ivan Degregori & Gonzalo Portocarrero, *Cultura y globalización*, Lima : Red para el Desarrollo de las Ciencias Sociales en el Perú, pp. 359 - 384.
- Ong, Aihwa & Donald M. Nonini  
1997 *Ungrounded Empire : the Cultural Politics of Modern Chinese Transnationalism*, New York : Routledge.
- Parker, David  
1995 “Los pobres de la clase media : estilo de vida, consumo e identidad en una ciudad tradicional”, en Aldo Panfichi H. y Felipe Portocarrero S. eds., *Mundos Interiores : Lima 1850 - 1950*, Lima : Universidad Pacífico, pp. 161 - 185.
- 1998 *The Idea of the Middle Class : White-Collar Workers and Peruvian Society, 1900 - 1950*, Pennsylvania : The Pennsylvania State University.
- Portocarrero, Gonzalo  
1998 “Ajuste de cuentas : las clases medias en el trabajo de Tempo”, en Portocarrero, Gonzalo ed., *Las clases medias : entre la pretensión y la Incertidumbre*, Lima : Sur Casa de Estudios del Socialismo & OXFAM-Gran Bretaña, pp. 13 - 34.
- Sandoval, Pablo  
2000 “Los rostros cambiantes de la ciudad : cultura urbana y antropología en el Perú”, en Carlos Iván Degregori (ed.), *No hay país más diverso*, Lima : Red para el Desarrollo de las Ciencias Sociales, pp. 278 - 329.

- 佐藤俊樹 (Sato, Toshiki)・石原英樹  
 2000 「市民社会の未来と階層階級の現在—『中』社会の終焉から—」高坂健次編『日本の階層システム 6 階層社会から新しい市民社会へ』東京大学出版会、201-222ページ。
- SEA (Servicios Educativos El Agustino)  
 1993 *Hablan los dirigentes vecinales : entrevistas a 27 dirigentes de El Agustino*, Lima : SEA.  
 1996 *Hablan las mujeres dirigentes : testimonios de 28 dirigentes de El Agustino*, Lima : SEA.
- 園田茂人 (Sonoda, Shigeto)  
 2000 「『閉じた階層研究』から『開かれた階層研究』へ—グローバル時代の階層問題と『日本社会』—」, 高坂健次編『日本の階層システム 6 階層社会から新しい市民社会へ』東京大学出版会、223-240ページ。
- Tapia, Rafael  
 1998 “Individuación y comunidad en la cultura empresarial chola peruana”, en Portocarrero, Gonzalo ed., *Las clases medias : entre la pretensión y la incertidumbre*, Lima : Sur Casa de Estudios del Socialismo & OXFAM-Gran Bretaña, pp. 339 - 355.
- TEMPO  
 1993 *Los Nuevos limeños*, Lima : Tafos-SUR.
- Torres Guzmán, Alfredo  
 2001 “De la clase media al NSE B”, *etece*, No.20 (15 de setiembre de 2001) : pp. 18 - 22.
- Venturo Schultz, Sandro  
 2001 *Contrajuventud : ensayos sobre juventud y participación política*, Lima : IEP.

## 資料：調査票による面接調査項目

面接調査に関しては、使用する調査票の質問項目の検討および面接調査計画・実施などについて、ペルー問題研究所所属の研究者と調査助手に協力してもらった。面接調査対象としたのは、リマ市でも高所得者の比率が高いラ・モリーナ地区および低所得者の比率が高いエル・アグステイーノ地区に10年以上の居住歴をもつ10家庭であり、調査票は以下の項目を含む。

- ①調査家庭のプロフィール (構成員の諸属性)
- ②家財・家計
- ③労働経験
- ④日常生活における活動範囲
- ⑤社交面・人間関係・人的ネットワーク
- ⑥嗜好 (食事・マスメディア接触)
- ⑦一日の過ごし方 (平日・休日)